

# 猿新聞

編集責任者  
山村 準  
tel:0595-63-1725  
Email  
jyun.y@asint.jp  
名張鳥獣害問題連絡会  
発行部数  
【全戸回覧】  
錦生地区：100部  
赤目地区：150部  
箕曲地区：70部  
ひなち地区：220部  
つつじが丘：430部  
【全戸配布】  
国津地区：380部  
市民センター：90部  
(9地区)  
名張市議会：20部  
名張市役所：20部

## 四季を通じて絶えない

# イノシシ被害

イノシシによる被害は、春はタケノコ、夏から秋にかけては水稲の被害や踏み倒しのほか、年間を通して畑作物の被害のほか、畦畔や農道の法面の掘り起こし被害が発生しています。また、ミミズなどを求め民家の庭先まで出没するなど、人身危害の恐れも生じている状態です。加えてイノシシによる交通事故も多発傾向にあります。

イノシシは学習能力が高く、前年、安全に侵入出来た田畑には明年も必ずといって良いくらい被害は深刻な問題です。イノシシ被害は年間を通じて発生していますが、それぞれの時期が食害のピークになっています。これは全ての野生動物に言えることで野生動物の本能でしょうか。

イノシシは単胃動物なので、その季節ごとに比較的栄養価の高い、柔らかい作物を選び集中して食害する傾向があります。年間を通じて順番に何らかの作物が加害されていますが、イノシシ被害で農家が最も打撃を被る被害は、農地の畦畔の掘り起こしや、農道や農業用水路・ため池の堤防が破壊されるなどの農業基盤破壊です。農作物被害より被害コストが嵩み、一農家では復旧できない場合が多くあり心配されています。

被害を防ぐには、何よりもまず、動物たちの行動や習性を正しく理解することが重要になります。イノシシは臆病で、注意深い性格の持ち主です。猪突猛進は、臆病の裏返し行動のようです。鼻は、犬に匹敵する嗅覚をそなえています。餌の探索は主に臭覚に頼っています。また、鼻は地面を掘るパワースピネルのような働きもして、50〜60cmの石でも平気で動かすことができます。この優れた嗅覚を逆手に取って忌避剤で対処しようと考えがちですが、イノシシには苦手な匂いは殆どないらしく忌避剤での防除効果は長期には期待できないようです。昔、先人が髪の毛などを忌避剤として使っていました。現代のイノシシは進化したのかも。また、視力は弱いですが、直接見ようとすると行動から、視覚を遮るトタンなどの目隠し対策は有効です。また、あの小さい目で100m先の敵が見分けられるので赤やオレンジ色の発光灯などでの威嚇効果は期待薄。ならば柵ですが、田畑をぐるりと囲んで防護柵を作ると、コストもかかるし、高齢者には管理も大変です。先ず、柵を作る前に集落周辺の環境に目を向けて見ましょう！雑草が茂って侵入しやすい環境になっていませんか？

放棄地がないという地域は殆どなく、多くの地域では耕作放棄の拡大が進んでいるという現状があります。藪化した耕作放棄地は、体を隠せる場所です。イノシシの絶好の棲家。藪・耕作放棄地をなくすことが、イノシシを農地へ寄せ付けない一番の方法です。しかし、耕作放棄地発生の要因を探るとき、難しい問題を解いて簡単には解決出来ません。ですが、これ以上増加させないという努力は必要です。

イノシシは環境の変化に敏感なイノシシの居心地を悪くし追い出すことができます。ここでイノシシの生態について少し触れておきます。イノシシは本来は昼行性です。臭覚や視覚は前述の通りです。体重は約60〜80kg程度になり、生後1年半で性成熟に達します。出産は年1回、分娩のピークは5〜6月ごろで、平均4〜5頭出産します。耕作放棄地や林縁部など身を潜められる場所を好み、巣を作り生活しています。対しては下をくぐり抜けようとす傾向が強く、20cmの隙間があればくぐり抜けてしまいます。その一方、1m以上の高さの柵を助走なしで跳び越えてしまいます。また、記憶能力が高く一度侵入に成功した田畑は覚えていています。成功した仲間の行動を模倣するなど、学習能力が高い動物です。

食性は雑食性で、農作物のほか、昆虫やミミズ、ネズミ等の小動物も食べています。イノシシの生態や習性などを詳細に調べて、効果的な対策を実施するよう心がけましょう。

イノシシは環境の変化に敏感な動物です。棲家となつていて、放棄地を草刈りしただけで、移動してしまい、その集落の被害が収まったという事例もあります。また、藪の草刈が大変だと思えば高齢者でも、藪や茂みをこれまでも1m以上でも広く草刈りをするだけで、環境の変化に敏感なイノシシの居心地を悪くし追い出すことができます。ここでイノシシの生態について少し触れておきます。イノシシは本来は昼行性です。臭覚や視覚は前述の通りです。体重は約60〜80kg程度になり、生後1年半で性成熟に達します。出産は年1回、分娩のピークは5〜6月ごろで、平均4〜5頭出産します。耕作放棄地や林縁部など身を潜められる場所を好み、巣を作り生活しています。対しては下をくぐり抜けようとす傾向が強く、20cmの隙間があればくぐり抜けてしまいます。その一方、1m以上の高さの柵を助走なしで跳び越えてしまいます。また、記憶能力が高く一度侵入に成功した田畑は覚えていています。成功した仲間の行動を模倣するなど、学習能力が高い動物です。



民家の庭先にまで迫るイノシシ被害！まるで耕運機で鋤き起こしたようです。令和元年5月矢川で撮影

イノシシは学習能力が高く、前年、安全に侵入出来た田畑には明年も必ずといって良いくらい被害は深刻な問題です。イノシシ被害は年間を通じて発生していますが、それぞれの時期が食害のピークになっています。これは全ての野生動物に言えることで野生動物の本能でしょうか。

イノシシは単胃動物なので、その季節ごとに比較的栄養価の高い、柔らかい作物を選び集中して食害する傾向があります。年間を通じて順番に何らかの作物が加害されていますが、イノシシ被害で農家が最も打撃を被る被害は、農地の畦畔の掘り起こしや、農道や農業用水路・ため池の堤防が破壊されるなどの農業基盤破壊です。農作物被害より被害コストが嵩み、一農家では復旧できない場合が多くあり心配されています。

被害を防ぐには、何よりもまず、動物たちの行動や習性を正しく理解することが重要になります。イノシシは臆病で、注意深い性格の持ち主です。猪突猛進は、臆病の裏返し行動のようです。鼻は、犬に匹敵する嗅覚をそなえています。餌の探索は主に臭覚に頼っています。また、鼻は地面を掘るパワースピネルのような働きもして、50〜60cmの石でも平気で動かすことができます。この優れた嗅覚を逆手に取って忌避剤で対処しようと考えがちですが、イノシシには苦手な匂いは殆どないらしく忌避剤での防除効果は長期には期待できないようです。昔、先人が髪の毛などを忌避剤として使っていました。現代のイノシシは進化したのかも。また、視力は弱いですが、直接見ようとすると行動から、視覚を遮るトタンなどの目隠し対策は有効です。また、あの小さい目で100m先の敵が見分けられるので赤やオレンジ色の発光灯などでの威嚇効果は期待薄。ならば柵ですが、田畑をぐるりと囲んで防護柵を作ると、コストもかかるし、高齢者には管理も大変です。先ず、柵を作る前に集落周辺の環境に目を向けて見ましょう！雑草が茂って侵入しやすい環境になっていませんか？

放棄地がないという地域は殆どなく、多くの地域では耕作放棄の拡大が進んでいるという現状があります。藪化した耕作放棄地は、体を隠せる場所です。イノシシの絶好の棲家。藪・耕作放棄地をなくすことが、イノシシを農地へ寄せ付けない一番の方法です。しかし、耕作放棄地発生の要因を探るとき、難しい問題を解いて簡単には解決出来ません。ですが、これ以上増加させないという努力は必要です。

イノシシは環境の変化に敏感なイノシシの居心地を悪くし追い出すことができます。ここでイノシシの生態について少し触れておきます。イノシシは本来は昼行性です。臭覚や視覚は前述の通りです。体重は約60〜80kg程度になり、生後1年半で性成熟に達します。出産は年1回、分娩のピークは5〜6月ごろで、平均4〜5頭出産します。耕作放棄地や林縁部など身を潜められる場所を好み、巣を作り生活しています。対しては下をくぐり抜けようとす傾向が強く、20cmの隙間があればくぐり抜けてしまいます。その一方、1m以上の高さの柵を助走なしで跳び越えてしまいます。また、記憶能力が高く一度侵入に成功した田畑は覚えていています。成功した仲間の行動を模倣するなど、学習能力が高い動物です。

食性は雑食性で、農作物のほか、昆虫やミミズ、ネズミ等の小動物も食べています。イノシシの生態や習性などを詳細に調べて、効果的な対策を実施するよう心がけましょう。

## H・P開設しています

### 名張鳥獣害問題連絡会



URL=http://sarusika.moo.jp

名張鳥獣害問題連絡会では平成23年9月より、H・Pを地域の鳥獣害対策をサポートするサイトとして立ち上げ現在に至っています。メニューは多彩ですが、周知度は極めて低いと思います。『改めてH・P開設をお知らせします』猿新聞閲覧にはH・Pを是非ご利用下さい。今後、皆様のご協力を得ながら活動の輪を広げて行きたいと思っています。

## チョット一服

クモは益虫？  
直接、人間に悪さをしないのに、なぜ人間に嫌われているクモ。田んぼなどで害虫を食べてくれるため、むしろ益虫として活躍していますが、なぜ人間から嫌われています。それはクモが餌を捉えるための、粘着力の強い糸で出来た巣が原因のようです。人間の髪の毛よりも細い糸で出来ているのに不思議と破れにくく、触ってみると少しベタベタしていて、気持ちのよいものではありません。また、家の中やクモの巣が張られていると不衛生な印象もあります。

日本には約1,200種のクモ生息しているそうです。その中に「カバキコマチグモ」という在来種の毒グモもいますが、近年では外来種の毒グモの生息域が広がって問題になっています。特に知名度が高いのが「セアカゴケグモ」です。背中にある鮮やかな赤の模様特徴で、強い毒を持っています。攻撃性もなくおとなしいクモなので、素手で触らないかぎり咬まれることはありません。見かけないクモを見つけても絶対に素手では触らないようにしてください。しかしながら、ほとんどのクモは無害で益虫です。田んぼなどで見かけてもむやみに駆除しないように。



# 中山間地域における 獣害対策への一考

山間に位置する中山間地域は、農地の生産効率が悪く大規模化も難しく、かつ高齢化により非耕作地が拡大され、それに伴い獣害が多発傾向にあるという危機的な状況にあります。これらの打開策として、農家、非農家を含めた地域全体で互助的組織の非営利法人の結成も一案として提案します。

行政の補助で地域農家が隣りあった田畑間に獣害対策用メッシュ柵を備えてから早や7〜8年が経ちます。しかし、柵の点検管理や補修不備のためイノシシやシカによる耕作地侵入で柵が破損され、放置されたままの状態を散見します。

世間で言う「耕作放棄した」のではなく「せざるをえない」というのが現状で、もはや「自分の田畑は自分で守る」という「自助努力」の限界が中山間地農家の現実と考えられるのです。今、農業を担う現役世代においても遠からず起こりうる切実な問題として考えて頂きたいのです。

これら高齢化による中山間地の農地所有者個々の自助努力の限界を鑑みれば、農業者と町づくり委員会などが中心となり、非農家の住民も連携し自らの地域の

農業人口、平坦農地と中山間農地の比率、農地・非耕作地、獣害による被害比率など判明している部分を総合的に分析し、地域全体の活性化を図る支援組織的「非営利団体」の法人化を目指す方途を探っていく所存です。

※クラウドファンディングとは、インターネットを通じて不特定多数の人に資金提供を呼びかけ、趣旨に賛同した人から資金を集める方法です。

Ｂ群では、平成30年末から発信器不備のため位置情報が分からない状態が続いています。位置情報はサル対策上欠くことのできない情報です。そこで名張鳥獣害問題連絡会では昨年からのＢ群エリア内での聞き取り調査を行っています。

Ｂ群の聞き取り調査。令和元年5月29日名張鳥獣害問題連絡会では、2回目のＢ群の聞き取り調査を実施いたしました。1回目実施して以来約1年になりました。

ルートを、赤目町長坂→伊賀竜口→大和龍口→西谷→滝谷→古大野→三本松長瀬で、不特定多数の方に聞き取り調査を実施いたしました。

まず、長坂では近頃では、有り難いことにサルを見かけることは少なくなつたといわれています。

里、子どもをもつた母ザルの警戒心が高まつて神経質となり、群れ全体の動きも過敏になる傾向があります。

秋季は交尾期であり、発情メスやそれを目指して集まってきたハナシの動きにかき乱されて群れの動きは不安定になる時期です。冬季にはあまり移動せず、比較的暖かい最も低標高域で過ごすことが多いです。

伊賀竜口では、最近サルを見かけることは少なくなつたが、毎日のように山で鳴いているとのこと。

大和龍口に入り、下川の畳屋さんの話では、前の山で2〜3頭を見かけることがよくあり、5月22日（水）10頭程の群れを見かけたという人がいるという事です。

西谷では、北峰さん夫婦に話を聞くことが出来ました。2週間ほど前（4月27日？）3〜10頭以上を見かけたこと。今年はジャガイモ、エンドウ、タマネギが大きな被害に遭つた。ジャガイモは2〜3回植え直した。電柵は設置していませんが、古いタイプのものでサルは出這入りの方法を覚え、自由に出入りしている。と、あきらめ顔。山間地域では柵の修繕などは、年寄りばかりでやりたくても出来ないという現状があります。群れの中には1頭の白いサルが目撃されています。

滝谷へは1ヶ月程姿を見せないと土産物屋の女主人。古大野に入り昨年話を聞いた森岡さんにお会いすることが出来ました。古大野には1年間ほど出没がなく、今年もは久しぶりに野菜の出荷が出来ると喜んでおられました。三本松長瀬周辺では出没はないとのこと。

は宇陀川より南側で、今のところ宇陀川を北側に超えて活動をしているという情報はありません。位置情報を事前に予測することが出来ない状態ですので、くれぐれもご注意ください。お願いします。



管理されていない柵  
令和元年5月矢川で撮影



管理されていない柵  
令和元年5月矢川で撮影

## サル出没状況

出産期ですので行動が変則になっているようです。

季節的な行動の特徴は、春季から初夏にかけては出産の時期であり、子どもをもつた母ザルの警戒心が高まつて神経質となり、群れ全体の動きも過敏になる傾向があります。

伊賀竜口では、最近サルを見かけることは少なくなつたが、毎日のように山で鳴いているとのこと。

大和龍口に入り、下川の畳屋さんの話では、前の山で2〜3頭を見かけることがよくあり、5月22日（水）10頭程の群れを見かけたという人がいるという事です。

西谷では、北峰さん夫婦に話を聞くことが出来ました。2週間ほど前（4月27日？）3〜10頭以上を見かけたこと。今年はジャガイモ、エンドウ、タマネギが大きな被害に遭つた。ジャガイモは2〜3回植え直した。電柵は設置していませんが、古いタイプのものでサルは出這入りの方法を覚え、自由に出入りしている。と、あきらめ顔。山間地域では柵の修繕などは、年寄りばかりでやりたくても出来ないという現状があります。群れの中には1頭の白いサルが目撃されています。

